

(2019年 三重県公立入試 類似)

- 平安時代末期に「院政」という仕組みが成立した背景を説明したものとして、最も適切なものはどれか。(2022年 大分県公立入試 類似)

- 平安時代に行われた「院政」と「摂関政治」の違いについて述べた説明として、最も適切なものはどれですか。 (2024年 栃木県公立入試 類似)

答え合わせ・解説

問1	答え 1 天台宗	平安時代初期、桓武天皇の支持を受けた最澄は、比叡山（滋賀県・京都府の境）に延暦寺を建て、天台宗を広めました。同時期に空海が伝えた真言宗とともに、当時の貴族の間に深く浸透しました。
問2	答え 4 藤原氏を外戚（母方の親戚）に持たない天皇が即位したことをきっかけに、摂関家の影響力を抑えて自ら政治を行おうとした。	藤原氏が権力を握っていた摂関政治は、天皇の母方の親戚（外戚）として政治を補佐する形をとっていました。しかし、藤原氏と血縁の薄い後三条天皇や白河天皇が登場したことで、藤原氏の顔色を伺わずに政治を行う土壌が整い、退位後も上皇として実権を振るう院政へとつながりました。
問3	答え 2 院政は天皇が位を譲って上皇となった後に実権を握る政治であり、摂関政治は藤原氏が摂政や関白として政治を行う体制である。	摂関政治は、藤原氏が娘を天皇の妃にし、生まれた子を天皇に立てて、その母方の祖父（外戚）として摂政や関白の地位に就き実権を握る仕組みでした。これに対し、院政は藤原氏と血縁関係の薄い後三条天皇の後の白河上皇が、藤原氏の影響を排除するために自ら政治を主導した仕組みを指します。
問4	答え 4 天皇を中心とした律令政治の再建を目指して始まったが、のちに藤原氏による摂関政治や上皇による院政が行われ、最終的に武士が実権を握る体制へと移行した。	平安時代は、桓武天皇が奈良の仏教勢力の影響を離れ、律令政治を立て直そうとして平安京へ遷都したことに始まります。しかし、時代が進むにつれて藤原氏が摂政・関白として権力を振るう摂関政治や、退位した天皇が政治を行う院政が展開されました。その過程で軍事力を持つ武士が台頭し、源氏が鎌倉幕府を樹立することで中世へと時代が変わりました。
問5	答え 1 坂上田村麻呂	当時の日本は遣唐使を派遣し、唐の進んだ制度や仏教文化を取り入れていました。最澄や空海が渡海したこの時代は、国内での中央集権化も進められていた時期にあたります。桓武天皇は国内の安定と勢力拡大を目指し、坂上田村麻呂を征夷大將軍に任命して東北地方へ派遣しました。彼は軍事的な成功を収めるだけでなく、現地の支配を安定させるための拠点作りを担いました。
問6	答え 4 天皇の位を譲り上皇となって、自ら政治の決定権を行使し続けた。	平等院鳳凰堂を建立した藤原頼通の時代には摂関政治がピークにありましたが、その後の白河天皇は、自らが上皇となることで摂関家から政治の実権を奪い返しました。これを院政と呼び、平安時代末期まで続く政治形態の転換点となりました。
問7	答え 1 天台宗	最澄は遣唐使とともに唐に渡り、帰国後に比叡山延暦寺を拠点として天台宗を広めました。同時期に空海が伝えた真言宗とともに、当時の貴族社会に大きな影響を与えました。浄土宗は鎌倉時代に法然が開いた宗派、時宗は一遍が開いた宗派であり、時代が異なります。
問8	答え 3 極楽浄土の宮殿を模して造られ、阿弥陀如来像が安置された平等院鳳凰堂	平安時代後期、藤原氏の氏長者であった藤原頼通によって宇治に建立されたのが平等院鳳凰堂です。当時流行した「浄土信仰（浄土教）」を背景に、現世に極楽浄土を再現しようとする意図がありました。国分寺は奈良時代、親鸞は鎌倉時代、金閣は室町時代に関連する事象です。
問9	答え 2 天皇との親戚関係を築くことで、平氏が貴族社会において正当な政治的権限を持つ立場であることを示す役割。	平清盛は、武力によって権力を得た一方で、娘を天皇の后にする「外戚政策」によって、伝統的な貴族社会のルールに則った政治権力を手に入れようとしてしました。安德天皇という自分に近い血縁者を天皇に据えることで、摂政や関白に近い立ち位置で政治を動かすことが可能になり、平氏の全盛期を築く大きな要因となりました。
問10	答え 4 瀬戸内海の航路を整え、大輪田泊を整備した	平清盛は、日宋貿易による経済的な利益を背景に平氏の権力を強化しようと考えました。そのために、瀬戸内海の航路を整備して海賊の影響を排除し、現在の神戸市にあたる大輪田泊を大規模に改修して貿易の拠点としました。
問11	答え 4 院政	白河天皇は1086年に幼い天皇に位を譲った後、自らは上皇として政治の実権を握りました。これは、藤原氏が代々務めてきた摂政や関白といった官職の枠組みから離れることで、藤原氏の影響力を弱め、皇室主導の政治を行うことが目的でした。
問12	答え 4 大宝律令	文武天皇の時代に完成したこの法典により、日本は法に基づく統治を行う「律令国家」としての歩みを本格化させました。それまでの慣習的な統治から、文書による組織的な行政運営へと移行した点が大きな転換点です。選択肢にある武家諸法度は、江戸時代に幕府が武士を統制するために出したものであり、この時代のものではありません。